

シドニーの青い空

「あれ、監督がいない！」

ゴールテープを切った瞬間、尚子は周りをキョロキョロ見回した。ゴールで待っていると言った小出義男監督の姿が見えなかったからだ。自分が日本人女子初のオリンピックマラソン金メダルを取ったことの嬉しさより、こんな晴れの舞台に監督がゴールに迎えに来ていない失望感の方が強かった。

2000年シドニーオリンピック女子マラソンには市橋有里、山口衛里と高橋尚子の三選手が出場した。前々回のバルセロナオリンピックでは有森裕子が史上初となる女子マラソンのメダル（銀メダル）を、前回アトランタオリンピックでも有森が銅メダルを取り「自分で自分をほめたい。」と語ったように女子マラソン界はこれまでにない盛り上がりを見せていた。

それとは裏腹に、オリンピック出場選手の選考方法について様々な批判が巻き起こり、物議を醸していた。日本陸連には選考の内規があった。オリンピックの前年に開催される世界陸上で日本人トップ、且つメダルを取ればオリンピック出場内定。その後開催される複数の国内選考レースの結果（順位、タイム）で残る2名、計3名の出場選手を選出するという選考方法は、致命的な欠陥があった。それは、開催地、季節、地形、天候、競合相手などがレースごとに異なるため、順位、タイムの単純比較ができないということである。さらに過去の実績なども加味されるので、極めて分かりにくい選考結果となることが多かった。（注）

シドニーオリンピックの選考では前年セビリヤの世界陸上で銀メダルを獲得した市橋有里がまず内定した。東京国際を制した山口衛里、大阪国際で2位になった弘山晴美と名古屋国際を制した高橋尚子の3人が残る2枠を争った。結果、それぞれのレースで優勝した山口と高橋が選出され、2位だった弘山は落選した。最もタイムが遅かった市橋が選ばれ、市橋よりタイムが良い弘山が落選したことから市橋の内定が早すぎたのではないかとの批判もあった。尚子はセビリヤの世界陸上にも選考されたが、直前に膝を故障し欠場している。また最終選考レースである名古屋国際の直前には、壮行会で出された仕出しのサバで食あたりを起こし入院していたが、2時間22分19秒の好タイムで三人目の出場枠を獲得した。

オリンピックのマラソンのスタート前、「♪愛はどこからやってくるのでしょう〜♪」いつものように尚子は hitomi の LOVE 2000 を聞きながらリラックス

していた。レースの10日前からシドニー入りした尚子は選手村には入らず、コース沿いに家を借りて監督やコーチとともに調整を続けていた。練習しているとシドニーの日差しが思いのほか強いことが分かり、日本人選手でただ一人レースでもサングラスを着用した。スタート後、日本人三選手のほか、海外の有力選手、世界記録（2時間20分43秒）を持つケニアのロルーペ、前回オリンピック金メダリスト、エチオピアのロバ、日本でもお馴染みのリディア・シモンなどがトップグループにいた。

5 km 地点にある最初の給水地点でアクシデントが起こった。強引に割り込んできた外国選手に押されて山口が転倒したのだ。すぐ起き上がり山口はレースを続けたが給水ボトルを取ることができなかった。次の給水地点で山口は上手く給水ボトルを取ることができたのだが、半分くらい飲んだときに尚子が給水に失敗していることに気が付いた。尚子に近づき、山口は給水ボトルを手渡した。尚子は山口に感謝するとともに、市橋も給水に失敗していることに気付く。尚子は市橋に近づき、四分の一残っていた給水ボトルを手渡した。後に尚子は、「山口さんの、あの給水ボトルにどれだけ助けられたことか。お陰でまた力を取り戻し後半のスパートに繋がった。」と語っている。

中間点を過ぎ、先頭集団は市橋、シモンと尚子の3人に絞られ、27 km からはシモンと尚子の一騎打ちとなった。30 km あたりから尚子はスパートをかける際にシモンの動きが良く見えるように、サングラスを取ろうと考えていた。どこの道端に捨てても良かったが、気に入っていた物だったので躊躇していたら、35 km 手前の左側の沿道で応援している父親の姿が見えた。父親に拾ってもらおうと投げようとしたとき、すぐ隣にシモンが走っていて、危うくぶつけそうになったので、一、二歩シモンの前に出た。サングラスを沿道の父親に投げ、ふと隣のシモンを見たら、シモンが付いてきていない。今だ！と思って尚子はスパートをかけた。この辺りは尚子が借りていた住居の近くで、何度も練習で走っており道路の状況は熟知していた。記録映像ではスパートする為にサングラスを投げたように見えるが、サングラスを投げた後、スパートすることを決めたのだった。ちなみに、このとき尚子のサングラスは歩道に届く前に警備のオートバイに当たり車道に跳ね返ってきていたのだが、沿道の係員が気付いて拾い上げ無事に尚子の許に戻った。

スパートをかけた尚子は必死だった。スパートは決まらないと、仕掛けた選手の負担が大きくなることを知っていた尚子は一度も後ろを振り返らなかった。シモンにかなり差をつけていると思っていた尚子は、競技場に入っても悠々と

走っている。ものすごい歓声が沸きあがったが、それはトップで帰ってきた自分を祝福してくれている歓声だと思っていた。しかし、それはすぐ後ろに迫っていたシモンの姿を見た観客の悲鳴だった。ふと競技場の大型スクリーンを見ると、シモンが真後ろまで迫っている。慌ててラストスパートをかけ何とか振り切ったのだった。

酒好きの小出監督は先頭集団が市橋、シモンと尚子の3人に絞られたとき、尚子の勝利を確信した。「毎日Qちゃんの走りをみているから、それくらい分かるよ。」後にそう語っている。沿道で応援するのは止め、スタジアムに戻ることにした。戻る車の中で祝杯と称して飲み続けて酔っ払いすっかり約束を忘れてしまった。その為マラソンのゴールに行けなかったのである。スタジアムに着くとすでに尚子のウィニングランが始まっていた。慌てて尚子を探しウィニングランの進行方向に合わせて競技場の縁を走り、大声で「Qちゃ〜ん」と呼びフェンス越しにようやく対面を果たすことができた。

尚子のタイムは2時間23分14秒のオリンピック新記録だった。山口は転倒しながら7位に、市橋は最後疲れて15位に終わった。

翌年2001年のベルリンマラソンに出場した尚子は当時の世界最高記録2時間19分46秒を出し、女子マラソンで世界で初めて2時間20分を切った。

(注) 自国開催となる東京オリンピックを契機として、日本陸連はようやく、その重い腰を上げ2020年の東京オリンピックマラソン日本代表選考会として「マラソン・グランド・チャンピオンシップ 通称MGC」を開催すると発表した。オリンピック開催の3年前、2年前、前年の3年間に於ける陸連が指定するマラソン大会で、タイムと順位をクリアした選手が開催前年の9月に開催されるMGC本大会の出場権を得られ、本大会のタイムと順位でオリンピック代表が決まるものである。男女ともMGC優勝者及び男子2時間5分30秒、女子2時間21分00秒の派遣標準記録をクリアした2位、3位の選手が内定する。これによって同条件での実力の比較が可能になり過去の選考時のような不透明さは解消できるようになった。